

山本眞一編

『大学事務職員のための高等教育システム論  
—より良い大学経営専門職となるために—』

（文葉社，2006年，150頁）

大場 淳（広島大学）

本書は、大学に務める事務職員（以下「職員」）を主対象として書かれたものである。近年の大学を巡る環境変化の中で大学経営を直接に担い或いはそれを支える人材（大学経営専門職）が必要とされているとの認識の下、大学経営専門職の多くは今の事務職員集団から輩出するべきとして、それを志す職員のために必要と思われる高等教育の基礎知識と心構えをまとめたものである。

本書は、「第一章 職場としての大学（本書の問題意識）」、「第二章 高等教育システムとは何か」、「第三章 大学の歴史として知っておくべきこと」、「第四章 変化する時代の中の大学経営」、「第五章 職員のプロフィール」、「第六章 すぐれた大学職員となるために」から構成されている。第一章は本書の導入として、求められる機能が拡張し変化が著しい大学において職員が経営に果たす役割が拡大していること、それに対応する試みとして筑波大学での研修を紹介している。

第二章及び第三章は、基礎的知識として職員が知って

おくべきことを高等教育システム及び大学の歴史の観点から取りまとめたものである。高等教育システムに関する第二章は、教育制度全般の中での高等教育の位置付け、高等教育システムの現状、国際比較、大学の諸機能、大学の管理・運営・経営について分かり易く解説している。続く第三章は、中世欧州に始まる大学の歴史を、特に日本における近年の大衆化とその影響に重点を置いて概説し、急激に進められた大衆化が様々な歪みをもたらした結果、大学改革が必然となっていることを強調している。

第四章以降は、第一章の問題意識、第二章及び第三章での基礎知識を踏まえて、具体的な経営上の課題並びに本書の主対象である職員自身の現状と今後の在り方を記したものである。経営にかかる諸問題を取り上げた第四章は、主要な課題として18歳人口減少、国立大学の法人化、質保証、知識社会と大学を取り上げて、大学経営の在り方等を論じている。そして、職員について取り上げた最後の二つの章のうち、第五章で職員の数的現状や開発活動の歩み、実態調査から見られる職員の状況や意識を概説し、最終章の第六章で大学経営専門職への期待とともに当該職になるための基本的能力の習得方法、開発を進めるに当たっての課題等に関する著者の考えをまとめている。

大学経営専門職になる或いはそれを育成するための提言は多岐に亘るが、その開発は「単なる研修だけでは不十分」として、「ある一定期間これを集中して学べる機会が必要であり、そこに大学院プログラムの存在意義がある」という点は、最も重要な指摘の一つであると思われる。既に職員向けに募集活動を行っている大学院は幾つか存在するが、それも含めて現状の大学院については「その大学院プログラムにおいて教育を担当する教員スタッフの確保は容易ではないでしょう。志と能力を有する大学職員に、幅広い大学問題の理解を前提に、問題解決能力を教える教員は、残念ながら現時点では明らかに不足しているのです」と述べ、実践から離れがちな大学教員に対して意識改革を促している。

余談にはなるが、山本氏は著書でその必要性を述べた大学経営専門職を「大学アドミニストレータ」と呼んでいるが、この「アドミニストレータ」の用法には若干の違和感を禁じ得ない。というのは、アドミニストレータ（administrator）は職務の機能に着目した呼称であって、大学の「アドミニストレーション（運営）」に従事しているのであれば身分（教員出身、職員出身など）や資質等は問わないはずである。したがって、学長や副学長を始めとして大学運営に従事している者がアドミニスト

レータであり、それが経営能力を有しているかは別次元の問題である。著者が本書で問題にするのはそのアドミニストレータ及びそれを補佐する者の資質であって、その資質を有すると考えられるのが筆者の言う大学経営の「専門職（プロフェッショナル）」であろう。英国の大学では職員はアドミニストレータではなくマネジャーであるべきであるという論調が支配的であるが、日本の大学で求められているのも経営の専門職であるマネジャーではなかろうか。